

復活節第4主日 説教 「人は生きたように死んでいく」要旨  
牧師 黒田直人

日本キリスト教団藤沢教会 2024年4月21日

ヨハネによる福音書 21:15-25

復活節第4主日の朝を迎えました。そこで早速この日の御言葉に聞いて参りますが、ところで、この日の御言葉は私の胸に迫まるものでもありました。それは、主が共にいますということがどういうことかを改めて実感させられたからです。

イエス様は、繰り返し、「私を愛しているか」とペトロに問います。ペトロもまたその度に「はい、主よ、私があなを愛していることは、あなたをご存知です」とこう答えます。しかし、ペトロが繰り返し同じように答えているにもかかわらず、イエス様は、三度、同じことをペトロに尋ねるのです。そして、その時のペトロの心境について御言葉は「悲しくなった」と語るのですが、それにしてもペトロはどうして悲しくなったのでしょうか。それは、きちんと答えているにもかかわらず、同じことを繰り返し何度も、イエス様が尋ねてきたからです。そして、その上で、御言葉は、そのペトロに「主よ、あなたは何かもご存知です。私があなを愛していることを、あなたはよく知っておられます」とこう答えさせるのですが、すると、イエス様はそのペトロに向かって「はっきり言うておく。あなたは、若いときは、自分で帯を締めて、行きたいところへ行っていた。しかし、年を取ると、両手を伸ばして、他の人に帯を締められ、行きたくないところに連れて行かれる」と、突き放すようなことを仰ったのです。それゆえ、この言葉を耳にして、ペトロはこう思ったに違いありません。自分はイエス様にはまったく相手にはされていたのだと。

それだけではありません。次の箇所を見ていきますと、ペトロに対するイエス様の扱いがますますエスカレートして行っているように思うのです。それは、ペトロがイエス様に「主よ、この人はどうなるのでしょうか」と愛弟子について尋ねたときのことです。そこでイエス様はこう答えたのです。「あなたに何の関係があるか。あなたは、私に従いなさい」と。これを聞いて、皆さんは何を思ったのでしょうか。イエス様がこう答えているのは、ペトロが愛弟子と言われた若者を嫉妬したことをご存知であったからです。そして、この一言を切っ掛けに、弟子たちの間でこの愛弟子の噂が

たちまち広がることになったのです。しかし、噂は噂に過ぎず、それがイエス様の真意ではありませんでした。そこで、噂を打ち消そうとして、「私が来るときまで彼が生きていることを、私が望んだとしても、あなたに何の関係があるのか」とイエス様は語ったのですが、ただ、イエス様がそう語っているのは噂を否定することが目的ではありませんでした。

それゆえ、ここからある一つのことを類推できます。それは、ペトロが予感したように、イエス様とペトロの関係性が非常に弱く、儂く、脆いものであったのではないかと、ということです。そして、私たちがそう考えるのには一つのはっきりとした理由があるからです。それは、十字架を前にし、ペトロが三度イエス様を拒んだというあの出来事です。まただから、イエス様はペトロに向かって三度「私を愛しているか」と尋ねている。ペトロもまた、そのことに負い目を負っているがゆえに、「それはあなたがよくご存知です」と自分の気持ちをはぐらかすような返答をなしている。それゆえ、ペトロを突き放すかのようなイエス様の非情な態度に私たちは戸惑いを覚えつつも、納得せざるを得ないので。それだけではありません。イエス様のこの非情さが私たちの中で更に際立って見えるのは、突き放しつつも、なお、その役割を全うするよう強く求めているからです。それは、ペトロと自分とがどこか重なって、身につまされるところがあるからです。

それにしても、ヨハネ共同体は、共観福音書にはまったく記されていないことをどうして補遺としてあえて残そうとしたのでしょうか。イエス様の物語は、イエス様が復活し、弟子たちの前に現れた、それで終わっていい話だと思えるのです。ところが、ヨハネによる福音書はその後のイエス様の非情な姿をこのように書き残すのです。しかも、そのようなイエス様の姿に多くの方は共感するはずもありません。にもかかわらず、イエス様の非情な姿を書き残そうとした。それゆえ、この「あえて」というところにヨハネ共同体の強い意志のようなものを感じないわけには参りません。従って、この補遺によって現されているところ

に、彼らをしてイエス様の物語を書き記させた理由と、これを書き加えてでも明らかにしたかった、彼らだけが経験したイエス様の真実な姿が現されているように思うのです。そして、それは、ヨハネ共同体の人々が抱えるある特殊な事情が影響していたからです。

御言葉が「これらのことについて証しをし、それを書いたのは、この弟子である。私たちは、彼の証しが真実であることを知っている」と最後のところでこう語るように、愛弟子と呼ばれている者と深い関係にあったのがヨハネ共同体の人々でありました。それゆえ、他の人々が聞いていない、愛弟子から直接伝え聞いた様々な事実がヨハネの共同体の人々に少なからぬ影響を与えたに違いありません。そして、それを私たちに伝えてくれているのが、「ペトロがどのような死に方で、神の栄光を現すようになるかを示そうとして」と語るこの御言葉です。それは、使徒言行録にも記されているように、福音宣教においてはペトロは欠かすことのできない存在であったからです。そして、そのペトロがローマで福音宣教に当たっているときのことで、伝説によれば、ペトロはローマで殉教したと言われていますが、その直前、身の危険を感じたペトロはまたもや同じように逃げ出してしまったのです。ところが、逃れる途中、「ペトロ、ペトロ、またお前はまた私を見捨てるのか」とのイエス様の呼びかけを聞き、悔い改め、再び元来た道へと引き返し、ローマで殉教したと言われていました。ただ、このことは、あくまで伝説であって真実とは定かではありません。しかし、ヨハネのこの補遺には、「年を取ると、両手を伸ばして、他の人に帯を締められ、行きたくないところに連れて行かれる」と伝説として伝えられていることをこのように臭わせるのです。つまり、ヨハネ共同体の独自性が彼らをしてペトロについてこう語らせたということです。

従って、そこには、ヨハネ共同体のペトロに対する複雑な心境が現されているように思います。つまり、ペトロに連なる正統的な教会との埋めがたい溝のようなものが隠されているということでもあります。なぜなら、マタイの16章では、そのペトロのことをイエス様が次のように語っているからです。「あなたはペトロ。私はこの岩の上に私の教会を建てる。陰府の力もこれに対抗できない。私はあなたに天の国の鍵を授ける。あなたが地上で繋ぐことは、

天上でもつながる。あなたが地上で解くことは、天上でも解かれる」と。それゆえ、この「年を取ると、両手を伸ばして、他の人に帯を締められ、行きたくないところに連れて行かれる」との言葉を踏まえるなら、そこにはヨハネ共同体の隠された意図が浮かび上がってくるように思います。つまり、イエス様の出来事を直接経験した愛弟子から、ヨハネ共同体はペトロの不都合な事実を様々聞いていたということです。それゆえ、ヨハネの共同体の人々にとって、ペトロに天の鍵を託されているという事実は看過することができないものであったのです。

そして、このことはまた、次の箇所からも推測できます。ヨハネによる福音書では、ペトロに向かって、イエス様に繰り返し「ヨハネの子シモン、私を愛しているか」と尋ねさせているのですが、ペトロという名はイエス様が名付けたものです。それにも関わらず、そのイエス様にペトロと呼ばせず、あえて「ヨハネの子シモン」とその本名で繰り返し語らせているのです。ですから、ここに、ヨハネ共同体が乗り越えなければならなかった深刻な問題が隠されているようにも思うのです。それゆえ、ペトロの愛弟子に対する嫉妬は、裏を返せば、ヨハネ共同体の、主流となったペトロを頂点とする教会への嫉妬であったと言えるのでしよう。このことはつまり、初代教会の間にあった様々な軋轢が彼らをしてこのような補遺を書かせたということです。ですから、そこから見えてくるところは、信仰を持ってしてもなお、嫉妬から逃れられずにいる信仰者の偽ざるその姿です。しかし、もしそうであるとすれば、そのすべてを詳らかにしようとするヨハネの共同体の姿勢には頭の下がる思いがいたします。

では、彼らをしてそうさせたものとはなんであったのか。それは、「自分たちだけが知っている」というこの思いでありました。ですから、先ほども少し触れましたように、ペトロの愛弟子に対する嫉妬がそのまま自分たちの裏返しの姿であると言ったのは、この「自分たちだけは知っている」ということが彼らに少なからぬ影響を与えたからだと思うのです。けれども、自分たちの不都合な事実を含めて詳らかにしたのがヨハネ共同体の人々でありました。そして、その彼らが悩みつつ出した答えが最後に記されている「イエスのなさったことは、このほかにもまだまだたくさんある。私は思う。その一つ一つを書くなれば、世界も



その書かれた書物を収めきれないであろう」というこの一言でありました。つまり、自分たちが知っているのはほんの一握りであり、すべてではないということです。ただし、この福音書を閉じるに当たって、彼らがこう語っているのは、彼らが現実と妥協したからではありません。語り尽くせないとあるのは、イエス様の出来事には、人間の考えるあらゆる論証や思考を拒むところがあるということです。そして、様々な軋轢の中で、彼らはそのことを経験し、知ったわけです。そして、それは、彼らが魂そのものが揺さぶられるような経験をし、イエス様によってその将来が無限の可能性を持っていると、彼らはこのことを知らされたからです。

ですから、ヨハネの共同体の人々がこの補遺を記したのは、ペトロを貶めることがその目的ではありません。彼らが経験し、そして、知ったことをただ伝えるためでありました。そして、その彼らの目をそのように開いたものがイエス様の復活の出来事であったのです。それは、イエス様の出来事から遠い時代を生きた彼らにとって、甦りのイエス様こそが、いや、イエス様だけが希望であり、この信仰ゆえの希望を実際に体験し、知ったのが彼らであったのです。それゆえ、御言葉が私たちに望んでいることは、この、経験し、知るということです。そして、それが御言葉に生きるということでもあります。では、御言葉に生きるということはどういうことなのでしょう。それは、私たちの上よりイエス様の愛が失われることがないということです。まただから、御言葉に生きた人々を介して、御言葉は人から人へとこうして受け継がれることになったのです。

御言葉を受け継いだ人々はこの世において強くたくましい存在であったわけではありません。もちろん、弱く儂いだけであったわけでもありません。続くということ、失われまいということがどういうことなのか、それについてダーウィンが進化論でも語っているように、種が長らえるために必要な要素は整った環境であって、努力や運や能力ではないのです。従って、教会が二千年この方続いてきたのは、そういう意味でふさわしく環境が整えられてきたからです。そして、この最後に記されたことは、まさにそれが真実であることを私たちに伝えてくれているのですが、それは、イエス様が私たちにその都度ふさわしく働きかけてくださったからです。つまり、それがそ

の愛の中に生きる私たちであるということです。それゆえ、私たちには計り知ることのできないイエス様の愛ゆえに、私たちはまだ見ぬ将来に対して確かな希望を持つことができるのです。

従って、この21章の最後に記されていることは、イエス様を信じるがゆえに与えられている無限の可能性と、ふさわしく働きかけてくださるイエス様と神様の御心の大きさです。つまり、彼らのこの経験と知識が、つまりは、その信仰が彼らをしてこのように語らせたということです。そして、この彼らをして語らしめたものがイエス様の愛であり、まただから、イエス様はペトロに対して、繰り返し、何度も「私を愛しているか」とこう問いかけているのです。まただから、イエス様の愛が失われまいことを経験させ、また知らしめようとして、「あなたに何の関係があるのか」とペトロを突き放すかのような言葉を投げかけたのです。それは、イエス様の愛を経験し、知るために必要なことは、いかにイエス様を愛するか、愛しているか、ということではないからです。そうではなく、その逆なのです。イエス様がいかに自分のことを愛しておられるのか、愛そうとされているのか、イエス様はこのことを知らしめようとしているのであり、従って、イエス様の物語の一番最後にこの補遺を記し、ペトロをここにこうして登場させているのは、イエス様を繰り返し裏切ることになったペトロがそうであるように、すべての人々を包むものがイエス様の愛であり、そして、ヨハネ共同体はそのことを実際に経験し、それゆえ、そのことをすべての人々に知らしめようとしたのです。

ですから、私たちはこのことからある一つのことを学ぶこととなります。それは、現実に対する私たちの対処の仕方です。つまり、地に足着けて、信仰を持って生きる術を、私たちはここから学ぶのです。それは、問題のない人間などいないように、この世にあって問題のない教会もないからです。また、イエス様が共にあってもなくなるものでもありません。だから、私たちは、こうしてイエス様のことを信じながらも、時に力をもって問題を解決しようとして、道を誤ったりもするのです。信仰を強さと弱さ、大きさと小ささなど、神様に頼るのではなく、誰もが納得するであろう、数字の魔力に魅了されてしまうのはそのためです。そして、それは、もしかしたら、イエス様が山上の説教の中で「あなたがた

の天の父が完全であられるように、あなたがたも完全な者となりなさい。」と仰ったからなのかもしれません。つまり、完全であらねばならないと思うのは、それが一因となっているということです。けれども、その直後でイエス様はなんと仰っているのか。イエス様は「見てもらおうとして、人の前で善行をしないように注意しなさい。さもないと、あなたがたの天の父のもとで報いをいただけないことになる。」とこう仰っているのです。つまり、完全であると決めるのは誰なのかということです。ですから、私たちが疑いや憤り、憎しみを募らせるのは、御言葉をつまみ食いをするか、あるいは、自分が食べやすいように手を加えようとするからです。そして、それが、ペトロであり、私たちであるように思うのです。

しかし、それにも関わらず、御言葉通りにその私たちの将来が開かれ、今日を迎えている、それはどうしてなのでしょう。それは、私たちが、力や数に寄りかかってきたからではありません。イエス様の愛の中にあつて、私たちが歩んできたからです。しかも、それは、私たちだけでなく、私たちと共にある世界に生きるすべての人々、あらゆる命についても同じことが言えるのです。それは、イエス様の愛に限界はなく、それゆえ、終わりはないからです。だから、御言葉はあるところで「愛は多くの罪を覆う」と語り、まただから、あるところでも「私たちが愛するのは、神が先ず私たちを愛してくださったからです」と語るのです。それは、イエス様の愛とは、このように私たちがイエス様の愛を知り、経験するものであるからです。けれども、それにも関わらず、私たちは愛に破れがあり、それゆえ、愛は失われ、結果、手に届かないと感じてしまうのはどうしてなのか。ところが、御言葉が私たちにこの日語り聞かせてくれていることは、イエス様のことを何度裏切ったかも分からないペトロが、神様とイエス様の愛の中にどこまでもどこまでも置かれているというこの事実なのです。まただから、御言葉は、この愛をきれいごとで終わらせないために、彼ら自身の不都合な事実を含め、すべてのことを詳らかにさせ、イエス様の愛の真実を明らかにしようとするのです。つまり、実を事実として、現実を現実として、誤魔化さずしっかりと受け止め、なおかつ、その上で御心から離れず、将来の無限の可能性、希望を見出したのがこのヨハネ共同体の人々で

ありこのように、御言葉の上にとしっかりと立ち、御言葉を経験し、御言葉を知ったのがヨハネの共同体の人々であったということです。

ただ、この御言葉の上にとしっかりと立つとはどういうことなのでしょう。しっかりとということから、正しくとか、完全にとか、そうしたイメージをなかなか払拭できずにいるのが私たちであると思うのです。それゆえ、私たちの多くは、信仰というものを一つの完成形に近づかせなければならぬものだと思ったりもするのですが、もちろん、努力は大事なことです。でも、どうでしょうか。誰の手も借りずに、完全な形でその生涯を終えることのできる者などいるのでしょうか。こういう言い方をしたら、これまで一生懸命に頑張ってきた方は腹立たしく思うのかもしれませんが、ペトロがそうであるように、どんなに一生懸命に頑張ったところで、堂々巡りを繰り返して、結果、中途半端な形で終わるしかないのが私たちの一生なのではないでしょうか。けれども、その私たちのことをイエス様は愛をもって受け止め、その将来を約束して下さっている、私たちがその生涯を通じて、経験し、知らされることは、このイエス様の愛であり、この神様の御心なのです。ですから、私たちは、自分自身の中途半端さを嘆く必要はありません。愛しているかと問うイエス様の愛の中に置かれているのは間違いのないことだからです。そして、このことをペトロという具体的な存在と自らの葛藤を通してヨハネの共同体は知ったのです。

それはヨハネの共同体に限ってということではありません。私たちの交わりの中においていつも起こっていることなのです。ですから、自分自身の完成を目指して足掻くのではなく、破れを破れとして互いに受け止め合うことのできる私たちであり続けたいと思うのです。ただ、ペトロがそうであるように、イエス様の愛に生きるということはなかなか収まりの悪いものでもあるのでしょうか。けれども、そこで破れを互いに受け止め合うところに愛があり、愛があるがゆえに、そこに生きるために必要なすべてのことが、御言葉という形でこうして受け継がれることになったのです。そのためにも、互いに主の愛の中に生かされていることを知り、そして、経験する、そのような私たちでありたいと思います。祈ります。